

## 2 フィブリン平板法

**原理** フィブリノゲン溶液にトロンビンを加えて作製したフィブリン平板の上に検体を置き、活性化されたプラスミンによってフィブリンが溶解し、一定時間後の溶解輪の面積から線溶能を測定する方法である。従来の**標準平板**はフィブリン中にプラスミノゲンが混在したものであり、プラスミノゲンを除くために加熱処理を行ったが、近年は**プラスミノゲンフリーフィブリン平板**が作製できるようになった。標準平板は検体中のプラスミン、プラスミノゲンアクチベータを反映するとされたが、検体中の抗プラスミンの影響を強く受ける。現在では平板中のプラスミノゲンを利用して、血液・尿・組織などより抽出したPAの測定などに利用される。

プラスミノゲンフリーフィブリンと寒天を混合して作製するフィブリン寒天平板は作製が容易で、保存性がよく、臨床応用に適している。検体中のプラスミノゲンをストレプトキナーゼやウロキナーゼで活性化したのち、この平板を利用して溶解輪を測定し、プラスミノゲンの測定ができる。血漿の場合は $\alpha_2$ PIの影響を除くためにユーグロブリン分画を用いて行う。

また、リジンセファロースにプラスミンやプラスミノゲンが特異的に吸着することを利用して、血漿をリジンセファロースカラムに添加したのち、未吸着分画（抗プラスミンを含む）、高濃度の食塩で溶出する分画（プラスミノゲンアクチベータを含む）と10 mmol/l 酢酸で溶出する分画（プラスミン、プラスミノゲンを含む）を分取する実用的な方法が考案されている（五十嵐：臨床検査17：713, 1973）。これらの分画を用い、標準平板で**PA活性**を、プラスミノゲンフリー平板で**プラスミノゲン**および**プラスミン**を測定できる。いずれの方法とも詳細は31版を参照のこと。

**判定** 血漿および血清には溶解作用はないが、ユーグロブリン分画（ホウ酸緩衝液にて溶解）を用いた場合は、**標準平板法**で30～100 mm<sup>2</sup>、**プラスミノゲンフリーフィブリン寒天平板法**では0～20 mm<sup>2</sup>である。